

# カッター競技いろいろ



五商船大会 回頭時  
手前：弓削 手後：広島

④ 商船高等専門学校  
商船高専では毎年**全国五商船大会**が開かれている。出場校は「**富山・鳥羽・弓削・広島・大島**」の五校である。開催時期は主管校によって変わるが、どの学校もこの大会のために力をつけてきている。部員である漕ぎ手は男女を問わず、皆が同じ艇の上でオールを一つにして戦う。コースは直線200メートルの距離を回頭、折り返しによる計1500メートルで行われる。回頭は各コースの回頭パイを反時計回りにする。

② 海事・水産・防衛等大学  
大学でも毎年**全日本カッター競技大会**が開催されている。毎年多くの参加校が優勝を目指し競い合っている。中でも防衛大学校が過去優勝回数最多で、連覇を成し遂げている。しかし、今年は鹿児島大学が防衛大学校に約四秒の差を付け、3年ぶり三回目の優勝を成した。この大会では男子艇だけでなく女子艇も出され、艇長・艇指揮各一人と漕ぎ手六人の計八人で1000メートルを競う。男子艇はその倍の2000メートルで競う。

① 全国水産・海洋・海技高等学校  
水産高校や海洋高校では、**全国水産・海洋高等学校カッターレース**大会が毎年行われている。この大会は全国各地代表校の十六校で行われる。コースは直線200メートルの距離を回頭、折り返しによる計1000メートルで行われる。写真は北陸地区で優勝した新潟海洋高等学校の回頭のシーンである。北陸地区では**富山・新潟・福井・石川**の四校が参加している。



北陸漕艇大会 新潟海洋高校 回頭時

回頭中にオールや船体の一部が回頭パイに当たると失格であるが、失格となってもゴール地点まで到達しなければならぬ。試合前のウォーミングアップや気合い入れの円陣などから、試合前ほどの学校からも身が引き締まる様子が見える。どの学校も少しでも速く漕こうと真剣で白熱した大会である。写真は今年の富山のもの。艇長・艇指揮の選手として共に戦った。

④ 横浜・神戸港等での大会  
カッターレースは学生だけではなく、一般の大会もあり、例として横浜港のレースをあげたいと思う。横浜市では帆船日本丸の横浜誘致を記念し、毎年五月頃に**横浜港でカッターレース**を開催している。以後毎年約30チームが大会にエントリーしている。大会では六人艇が使用され、レースは一般の部、女子の部で行われている。今では開港200周年を機に小学生レースも行われており、賑わいをみせている。艇員全員が力を合わせるこの大切さや、カッターの楽しさを感じることができるとのよい企画である。



北陸漕艇大会 富山高専 女子艇  
6人漕ぎの6mカッターを使用



五商船大会 富山高専円陣

# The Crew and Their Spirits for Cutter

富山高等専門学校 2年  
商船学科 漕艇部  
竹内 めぐみ・中原 嶺太郎

## ～カッターと私たちとの出会い～

カッターの起源は大航海時代である。本来は停泊中の様々な用務に使われるのが目的であった。例えば、港内で薪食料その他、航海に必要な物資を運ぶためである。他にも人員の輸送、交通連絡用にも使われていた。  
当時 様々な小型ボートがあったが、カッターとは「**短めのボート**」という意味である。その意味の通り、漢字では「**短艇**」と表される。だが、「**端艇**」や「**漕艇**」などと、表し方は様々である。学校や場所によつて表し方は変わるが、前者の表し方が正しいとされている。  
今では船員教育機関の訓練艇として使用されている他、部活動の競技として使用されたりと、幅広く多くの人に愛されている。カッター部は商船高専を始めとし、水産高等学校や大学、その他一般社でも存在している。だが、現在では部員数の減少や学校自体のカッターに対する意識が低くなってきているという悲しい現実もある。

北陸漕艇大会(北陸地区の高校生の大大会)  
富山高専専門学校 回頭後の力走



北陸漕艇大会 富山高専専門学校 スタートダッシュ

そもそも、カッターとは何なのか説明してきたい。カッターとは左上写真のような手漕ぎの全長九メートルのボートである(富山高専専門学校)。乗組員は**全員で十四名**であり、そのうち十二人は漕ぎ手である。左右六人ずつでオールを使って漕いでいく。漕ぎ手の他には、船尾で舵を取る艇長、号令をかけ指揮を執る艇指揮がいる。この十四人が力を一つにして初めてカッターは走り出すのである。また、カッターは漕走(オールを使い漕いで船を走らせること)のほか、帆走もできる。帆走とは、**帆を張り、風のみだけで船を進める**走り方である。帆走は漕がない分、体力を温存することができるため遭難時などに役に立つのである。実際に使用された例も多い。  
カッターは部活動として使用される他、学校では授業で取り扱われたりもする。商船高専では一年生のときに漕ぎ方を学び、二年生で舵の取り方と、帆走の仕方等を学んでいく。学年ごとに学んでいくのは昔の兵学校時代と変わらぬ。また、学校行事としてカッターレースがあるのも昔と変わらない。  
このようにカッターとは昔と今で用途は違っても受け継がれ続けている乗り物だということが分かる。だからこそ私達はこれから、この歴史ある乗り物、競技を受け継いで伝えていかなければならない。その第一歩として多くの方々にカッターを知ってもらおうべくこの新聞を作成したいと思う。

### 宮島遠漕

短艇競技の他にも兵学校では学校行事として宮島への遠漕があった。この行事は諸行事中で最大行事といわれていた。江田島から宮島まで約十三キロメートル。艇長 艇指揮、漕ぎ手の十二人の計十四人で二つのチームとなる。九十隻のカッターが集い一斉に出発する。熾烈な優勝争いがあり優勝した分隊には乗組員全員にメダルが授与された。

江田島から宮島までの道のり  
約13kmを  
約2時間かけて漕ぐ

### 教育 海軍兵学校

著者：森本孝 発行社：東京ライフ社 昭和23年3月3日  
タイトル：「海軍兵学校」  
著者：セシルワグロウ 発行社：銀河出版 平成29年1月3日  
タイトル：「江田島 イギリス人教師が見た海軍兵学校」

海軍兵学校では、カッターは授業の一環や訓練などで使用されてきた。大雨にならない限り練習は行われ、唯一の休息日である日曜日以外練習は毎日行われた。手には肉刺ができて、尻は擦り剥けになるほどでも厳しい訓練だった。その厳しい訓練で鍛え上げられた技術や身体は毎年五月に行われる分隊対抗のレースで存分に発揮された。兵学校に通うものすべての学生がそのレースに熱を注いだ。今日でも防衛大学校では、陸・海・空の要員を問わず、2年次に**全員参加のカッターレース**が行われている。また、富山高専でも全員参加の全校カッターレースが行われている。どの時代、年代においてもカッターを漕ぐにあたって最も大切なことは**團結**することである。それは生徒たちの課題となり、重視されてきたものである。

### 短艇巡航

左図は、海軍兵学校での短艇巡航の際の写真である。軍艦名取の次席将校であり、戦記を著した松永一郎氏は、カッターでの航行中、不安で一杯な若い兵員にこの巡航の話、艇全体を落ち着かせた。松永氏は昭和十五年の海軍兵学校卒業生であり、在学中はカッターを学んでいた。そこから、カッターは昭和の初め頃から日本の学生や兵学校で扱われていたことが分かる。

海軍兵学校 短艇巡航  
先任将校～軍艦名取短艇隊掃投せり～ より転載

## 現場の人々に聞いてみた!

この著書は、昭和十九年に米潜水艦に撃沈された巡洋艦「名取」のノンフィクション戦記である。名取は輸送任務中、敵潜水艦の雷撃を二度まで受け、フリピンサマル島沖で大破沈没した。そのときの様子を当時 次席将校だった著者の松永一郎氏が自ら体験したことを忠実に著している。予測のつかない困難な緊迫状態の時、

### 「先任将校」軍艦名取短艇隊掃投せり

著者：松永一郎 発行社：光人社 昭和29年4月3日

上に立つものの役割や意義を考へさせられる一冊である。  
沈没後、生き残った名取の乗組員役30名は三隻のカッターに分乗し「先任将校」小林大尉(2)の指揮下で約半月間ほぼ飲まず食わずの状況で約30マイル彼方にあるフリピンを目指し、ひたすらオールで漕いだ。

極限状態である中 乗組員の不安、指揮官に対する疑心、心身の消耗による死者を出しながらも将校たちは知恵を絞り上げトランプを解決していく。  
航海道具がない中、現在地を天体や気候から求めるシーンや体温温存のため乗組員の服を縫い合わせ帆を作りカッターで帆走するシーンが心に残った。またこの状況下で半月も人々を結束させていた先任将校は素晴らしいと思った。見習いたい。

### 「あとがき」

この新聞が作成できたのは、取材に応じてくださった教諭の方々を始め多くの方々の協力によるものであり、この場を借りて感謝の気持ちを述べたいと思う。また今回新聞を作成する中でカッターについて改めて学ぶことができ、良い機会となった。この新聞通し一人でも多くの方々にカッターへ興味を持ってもらうことを願い、しめたとおもう。ありがとうございました。

【富山高専 金山恵美教諭】  
金山教諭は富山高専の卒業生である。現在は**海洋実習**などの授業を担当している。海洋実習というのは船乗りとしての第一歩を学ぶ授業である。下学年では主にカッターについて学び、高学年では気象等を学ぶ。海洋実習等を教える立場から意見を伺うと「下学年にはカッターを始め船に興味を持ってほしい。そして船とはチームワークが一番大事ということを学んでほしい。高学年には船を動かすうえで大切な事を学んでほしい」と答えた。学生時代と今の違いや変わらない所を伺うと「オールが重いのは昔から変わりません」と笑って答えた。また「昔は雨晴巡航をしたりしたけど今はそのような機会がないから寂しい。時間

### カッターができるまで、おおよその工程

船殻(船の骨格を作る) カッターの最底部  
→ 帆柱 ストッパーなどを取り付ける  
→ 仕上げ(塗布完了) 白い塗料を塗る

完成(校草・番号着付) 帆柱調整(風の力で走る) マストは2本ある  
ERPオール(強度向上) 繊維強化プラスチック

### 滑川高等学校 海洋科 澤田和之教諭

滑川高校は私たちのライバルであり、富山県内でもカッターを行っている海洋高校である。澤田先生とカッターとの出会いは東京商船大学に進学してからである。当時のことを伺うと「空母(赤城)に乗り組んでおられた技術教官がまだおられたらしく水面での休憩中に戦争の話をお聞かせいただいた」と答えられた。現在、滑川高等学校海洋科では**海洋クラブ**としてカッターの活動をしており、澤田先生はその海洋クラブの顧問である。三年生のバスケットなどで早めに引退した生徒が集まって一艇分の漕ぎ手を集めているらしい。水産・海洋高等学校は部活の他にも水産高等学校では文部科学省で規定されている高等学校学習要領において必修教科が二つあり、その中の「水産海洋基礎」の中にカッターの項目があり、実習を行うことが必修となっている。

澤田先生が着任した当時は春から秋までは全学年週四時間のカッターの授業があった。また二年次には、滑川から黒部までの遠航実習があったと話している。だが現在では放課後の練習以外は一年生の実習が年六回程度あるだけで寂しい限りです、と答えた。

澤田先生に、カッター部に向けて一言いたさんと「カッターで得られる経験は貴重なものばかりです。伝統を引き継ぎ頑張ってください。」と答えた。

学校は違うが、カッターに携わる者として深く言葉を受け止め、練習に励んでいきたいと思います。

滑川高校 澤田教諭

平成26年1月に納入された富山高専のカッターの製作状況。  
(株)岡村造船所の施工完成図書より。